

論文

## 子どもの町並み景観認識

——町並みとの調和からみた景観評価——

曲田 清維  
愛媛大学教育学部A Study of Children's Recognition of Townscape  
—Evaluation on the Harmony with Townscape—Kiyotada MAGATA  
Faculty of Education, Ehime University

(受付日 1992年3月25日・受理日 1992年11月15日)

This study is about children's recognition of their townscape. It represented how the children recognized the harmony of arrangement of houses and buildings with the townscape in Youkaichi and Gokoku area, Uchiko-cho.

As a result, it appeared that children's evaluation on the harmony with townscape depended on their attachment for the town, and the deeper attachment children had, the more exactly or accurately they evaluated the harmony. And the more they recognized it, the more they took up positive attitude to the preservation of their town.

Consequently, in education of the townscape and the preservation of the town for children, it is important to turn up their interest in their own town, with foundation on history and life of the town.

Key words : harmony, children's recognition, attachment, townscape

## 1. はじめに

パトリック・ゲデス(注1)は「環境教育の父」と呼ばれ、環境教育に関する様々なアイデアを提起した。英国環境教育は、彼の影響を大きく受け、公教育における4つの伝統を確立した。その4つとは、①環境学習の伝統 ②保全の伝統 ③戸外教育の伝統 ④都市学習の伝統、であり、この伝統が自然環境の保全と同時に、人間生活と自然が調和した居住形態を考察していく教育を進めてきた。そして、地域における歴史的環境も、人類の優れた文化的遺産であり、それらに対する価値と保全の重要性を学ぶことは、環境教育の大切な

柱のひとつでもあることも明確にされている。

わが国でも、町並み保存運動や伝統的建造物群保存地区の選定(1975年制度制定)以来、全国各地で町並み保存の気運が高まり、こうした動きが学校教科書でもしばしば取り上げられるようになった(注2)。町並み保存は極めて「環境教育」的なテーマであり、それは保存とは何か、開発との両立をどう考えるかという意味にはかならず、環境形成に関する価値判断を問うものと言える。その中で「景観」(注3)は、環境との調和をはかる要素のひとつとして、歴史的町並み保存や町づくりの重要な柱となっており、教育の場面でも様々な側面から景観の中味と美しい景観づくりの

〔問い合わせ先〕〒790 愛媛県松山市文京町3番 愛媛大学教育学部住居学研究室



表1 学年別子どもの好きな街区

	商店街	JR駅前	戦前住宅	保存地区	計
小3	16 16.3	16 16.3	7 7.1	59 60.2	98 100.0
小4	10 11.5	16 18.4	8 9.2	53 60.9	87 100.0
小5	11 12.5	14 15.9	4 4.5	59 67.0	88 100.0
小6	5 4.5	11 10.0	13 11.8	81 73.6	110 100.0
中1	11 8.6	16 12.5	16 12.5	85 66.4	128 100.0
中2	15 11.5	18 13.7	11 8.4	87 66.4	131 100.0
中3	8 6.3	24 18.8	7 5.5	89 69.5	128 100.0
計	76 9.9	115 14.9	66 8.6	513 66.6	770 100.0

上段：実数 下段：百分率 (表2以下同)

「好きか否か」に加え、構成物が内子の町並みに「似合うか否か」も聞いた。後者については、町並みとの「調和」が理解できるかどうかを念頭に置いたものでもある。また、町並み保存に対する意向なども併せて聞いた。調査時期は1990年11月、対象者は小学校3年生から中学校3年生まで、回答は各クラスで授業時間中に行った(注8)。有効回収数は、小学生383、中学生387の計770であった(各学年別数は表1の合計欄参照)。

### 3. 子ども達の好きな街区

子ども達に4つの通りを挟む街区の写真ア～エを見せ、どれが最も好きかを尋ねた。4つの街区は、町の中心部の商店街(ア)、戦前の住宅が立ち並ぶ住宅街(イ)、駅舎や街路・スーパーが整備され町の新しい顔となりつつあるJR駅前(ウ)、改修住宅がいくつか連続して並ぶ保存地区(エ)であり、どれも子ども達によく知られた身近なところである。

最も支持されたのは保存地区で66.6%、次いでJR駅前14.9%、商店街9.9%、戦前住宅地の8.6%と続く。過半の子ども達が保存地区に好感を寄せ、保存地区に近接して、少し似通った風景を見せる戦前住宅地を含めると、4人に3人が古い街区を認めた。学年別には、どの学年も保存地区の支持

表2 保存地区が好きか否か

	好き	好きではない	計
小3	70 71.4	28 28.6	98 100.0
小4	39 44.8	48 55.2	87 100.0
小5	59 67.0	29 33.0	88 100.0
小6	60 54.5	50 45.5	110 100.0
中1	67 52.3	61 47.7	128 100.0
中2	50 38.2	81 61.8	131 100.0
中3	57 44.5	71 55.5	128 100.0
計	402 52.2	368 47.8	770 100.0

が高く、小6、中3では70%近くに上るが、小3、小4で商店街とJR駅前、中1で戦前住宅地の支持がやや目立つ(表1)。

一方、写真とは別に、保存地区である「八日市・護国地区が好きか否か」を聞くと、上の結果と若干違った様子を見せた。全体では半数を越える52.2%の子ども達が好感を示したが、学年別では、学年が上がるにつれ好きだという比率は減少傾向となり、中2で38.2%と最低となった。先の写真による反応とこうした質問による反応は、少し飾られた写真での町並みと、現実の生活での町並みの比較という点でやや異なった答となった(表2)。

そこで、より正確に「町並みの好み」の強さを見分けるために、上の2つの質問をクロスさせ、表3のように保存地区を軸に、愛着派、中間派、非愛着派の3グループに分けた。即ち、保存地区の写真を選びかつ保存地区が好きだとするグループを愛着派、商店街及びJR駅前の写真を選びかつ保存地区は好きではないとするグループを非愛着派、その他を中間派として区分した。その結果、各々36.5%、13.9%、49.6%となった。

学年別にみると、愛着派は小5で最も多く51.1%、小4では最も少なく27.6%、また小学生と中学生を比較すると、愛着派は各々40.2%と32.

表3 好きな街区と保存地区の好き嫌い

	好き	好きではない	計
商店街	35	41	76
	46.1	53.9	100.0
JR駅前	49	66	115
	42.6	57.4	100.0
駅前住宅	37	29	66
	56.1	43.9	100.0
保存地区	281	232	513
	54.8	45.2	100.0
計	402	368	770
	52.2	47.8	100.0

愛着派
  中間派
  非愛着派

8%で、小学生の比率が高い(表4)。男女別では、男子の愛着派は29.1%であるのに対し、非愛着派は18.1%、女子では各々42.6%と10.2%であり、女子における愛着派の比率が高い(表5)。子ども達の居住地別にみた愛着派の比率は、保存地区及びその近辺(対象者の約7%が居住)で45.5%、市街地(町中)で37.8%、山間部で33.6%となっており、保存地区近辺での比率がやや高くなっている。

表4 学年別町並みの好み

	愛着派	中間派	非愛着派	計
小3	42	47	9	98
	42.9	48.0	9.2	100.0
小4	24	48	15	87
	27.6	55.2	17.2	100.0
小5	45	29	14	88
	51.1	33.0	15.9	100.0
小6	43	59	8	110
	39.1	53.6	7.3	100.0
中1	46	67	15	128
	35.9	52.3	11.7	100.0
中2	38	67	26	131
	29.0	51.1	19.8	100.0
中3	43	65	20	128
	33.6	50.8	15.6	100.0
計	281	382	107	770
	36.5	49.6	13.9	100.0

以下、構成物が保存地区の町並みの景観とどう調和するか(似合うか否か)を、環境デザイン、建築デザイン、住宅における評価を通して、町並みの好みからみた3グループの比較に加え、学年

別の分析も交えながら検討していく。

表5 性別からみた町並みの好み

	愛着派	中間派	非愛着派	計
男子	103	187	64	354
	29.1	52.8	18.1	100.0
女子	176	195	42	413
	42.6	47.2	10.2	100.0
不明	2	-	1	3
	66.7	-	33.3	100.0
計	281	382	107	770
	36.5	49.6	13.9	100.0

#### 4. 町並みの好みからみた環境デザイン評価

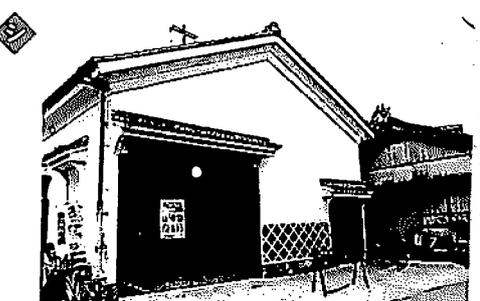
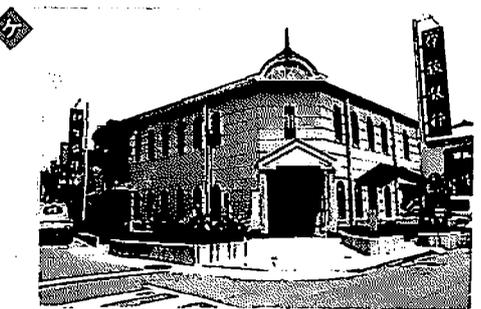
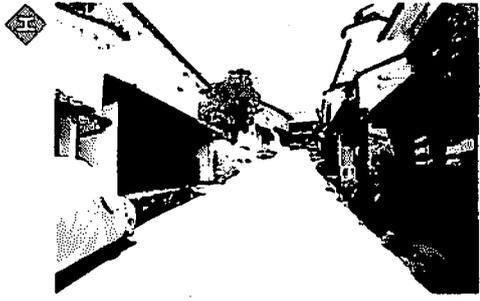
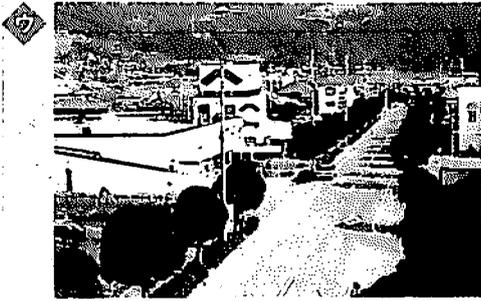
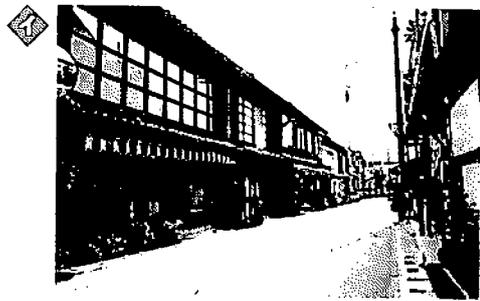
町並み整備は、住宅・建築と同時に、街路や電柱など(環境デザインと総称)の整備も重要課題として取り組まれている。子ども達には、住宅・建築物の改修による変化と同時に、町並みに大きな影響を与えるものとしてのそれらの調和度を尋ねた。提示した写真は、電柱・電線、看板、電話ボックス、道標の4つであり、それぞれ町並みに似合うか否か判断させた(写真オーク、写真オは数年前の光景で現在電柱は既に撤去されている)。

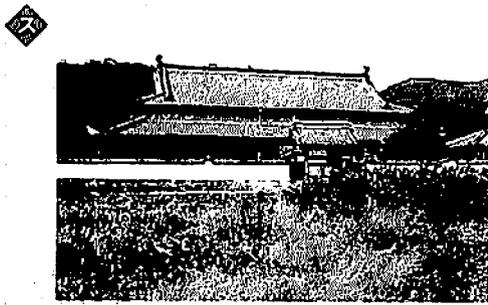
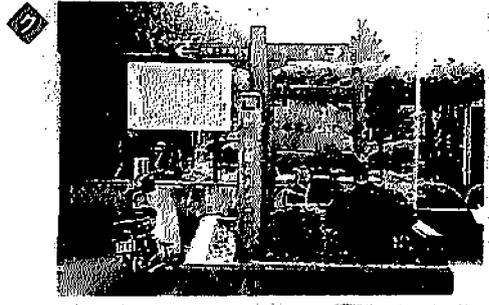
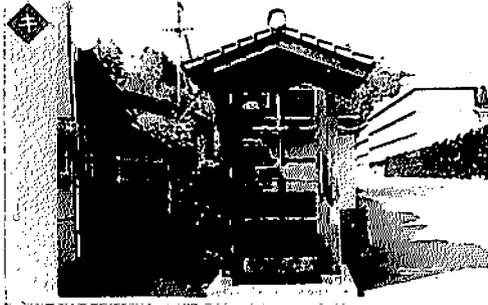
保存地区にかつて存在した電柱・電線については、愛着派85.4%、中間派74.7%、非愛着派69.2%が似合わないとしており、愛着派でその比率が高い(図2)。看板についても同様な傾向で、各々81.5%、77.2%、66.4%が否定している(図3)。町並みに合わせた屋根付きの電話ボックスについては評価が一致し、中間派の評価が78.0%とやや低くなるほかは、愛着派83.3%、非愛着派81.3%とも評価は高い(図4)。また、道標はどのグループも評価が高いが、それでも愛着派は、中間派、非愛着派に比べると、さらに高くなっている(図5)。

環境デザインに対する調和の評価は、良いもの、悪いもの(邪魔なもの)の相違は概ね明確に表れた。その上で、電話ボックスの評価を除けば、わずかながらグループ別の違いがみられた。

#### 5. 町並みの好みからみた建築デザイン評価

保存地区の内外は、公共的な建物を中心として、景観に合わせた改修が盛んだが、その中から1989





年3月に改築した銀行、モダンなハンバーガーショップ(注9)、古い小学校を改修した児童館、格子戸を持つ消防車庫の4つの建物の写真を子ども達に提示し、町並みに似合うかどうかを判断させた(写真ケース)。

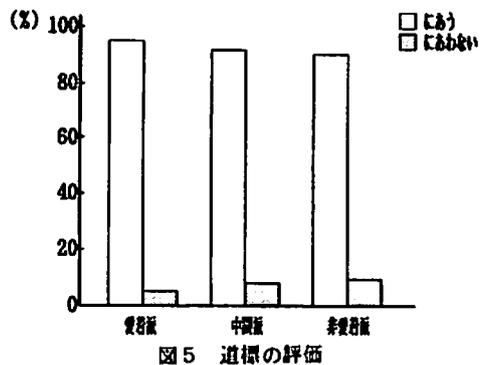
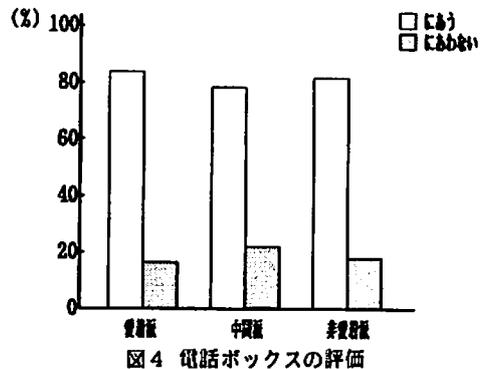
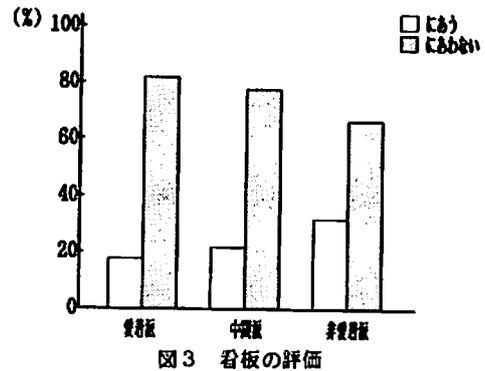
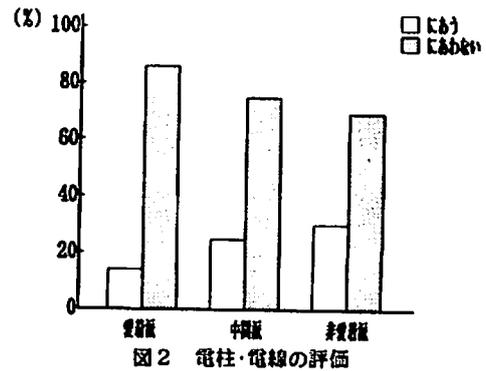
銀行についての評価は大きく分かれ、やや混乱した結果となった。似合うとしたのは全体ではほぼ半々であるが、グループ別では愛着派の51.6%、中間派の46.6%に対し、非愛着派は60.7%にのぼり、非愛着派の比率が高い。往時のものは明治末期の木造洋風建築であり、写真のものに建て替えられたわけだが、このデザインに対する好みや、以前の建物を知っている中学生を中心に明るい感じが受け、結果的に非愛着派での評価が高くなったようである(図6)。

保存地区を一步外に出ると、種々の現代建築が建てられつつあり、写真コはそうしたものを代表させたハンバーガーショップである。愛着派と非愛着派との違いは明確であり、似合うとするのは前者で8.5%、後者が31.8%、中間派は14.1%となる。非愛着派での否定も68.2%と高いものの、やや支持率が高いのが目立ち、町並みとはあまり関係なく判断を下している子どもが多いと思われる(図7)。

児童館は、愛着派で82.9%、対して中間派の74.3%、非愛着派の73.8%が似合うとし、いずれも高い評価だが、その差は10ポイント程になる。漆喰の古い小学校のデザインはなかなか好ましく、幼児や母親の利用で賑わっているこの建物は、ほぼ町の中心部に建てており、ランドマーク的存在にもなっている(図8)。

逆に、格子戸を持つ土蔵造り風の消防車庫は、児童館に近接して建っているものの、余り目立たない存在でもある。3グループとも児童館よりやや高い評価であるが、愛着派と中間派、非愛着派の差は各々10ポイント、17ポイントあり、やや開きが見られた(図9)。

建築物に対する評価は、町並みを意識したデザインにおいては、対比も含めて子ども達も敏感に反応するが、銀行の建物のようにやや現代的にリフォームしたものを、町家を中心とした町並みと



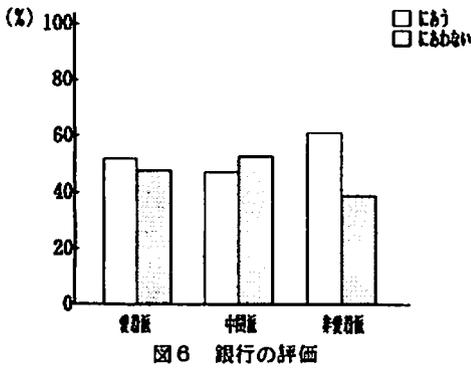


図6 銀行の評価

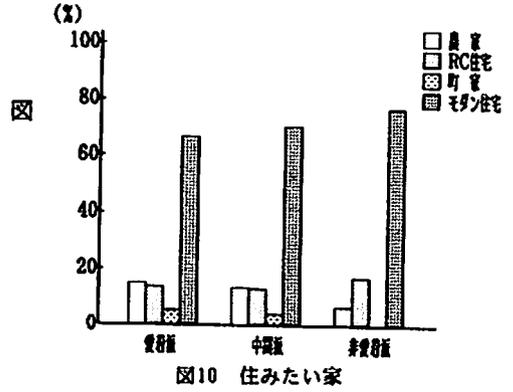


図10 住みたい家

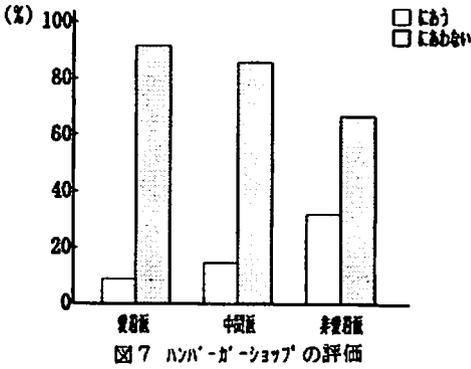


図7 ハンバーガーショップの評価

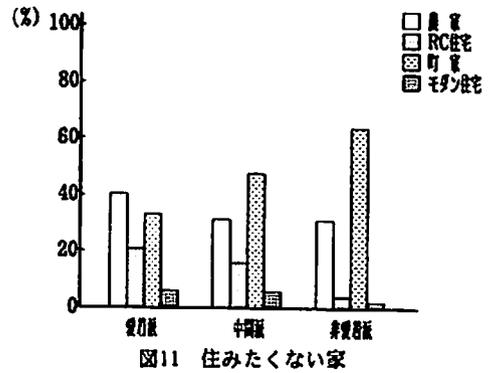


図11 住みたくない家

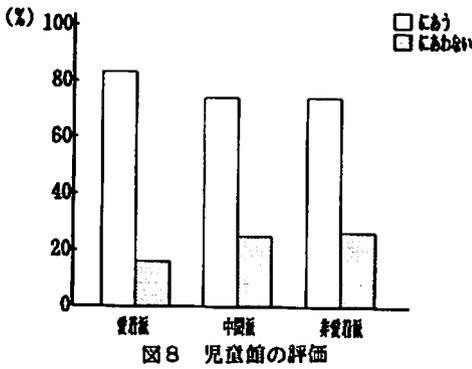


図8 児童館の評価

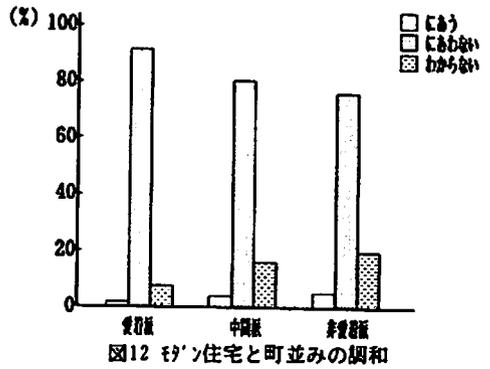


図12 モダン住宅と町並みの調和

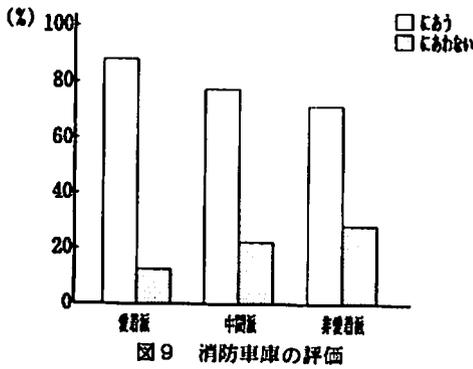


図9 消防車庫の評価

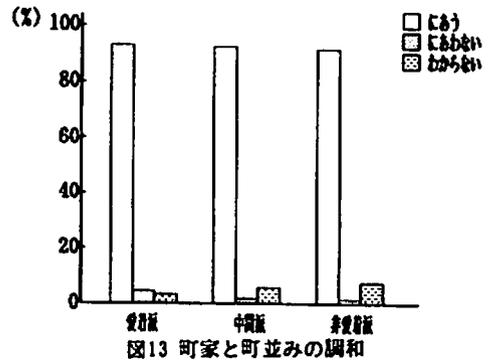


図13 町家と町並みの調和

表6 保存地区の印象

	肯定的要素						否定的要素			実数
	歴史が ある	町並み 美しい	静かで ほっと する	観光客 賑やか さ	川や緑 きれいな 景色	土産物 楽しい	同じ家 ばかり	人が少 ない	古くて 気味悪 い	
愛着派	232 82.6	198 70.5	143 50.9	119 42.3	116 41.3	54 19.2	6 2.1	6 2.1	4 1.4	281
中間派	294 77.0	150 39.3	139 36.4	151 39.5	122 31.9	74 19.4	50 13.1	43 11.3	31 8.1	382
非愛着派	75 70.1	37 34.6	38 35.5	35 32.7	24 22.4	20 18.7	26 24.3	22 20.6	17 15.9	107
計	601 78.1	385 50.0	320 41.6	305 39.6	262 34.0	148 19.2	82 10.6	71 9.2	52 6.8	770

の調和ということのみでいくことはなかなか難しいようだ。ちなみに、学年別に銀行の調和度をみると、小3における22.4%の肯定派が、学年が上がるにつれて増加し、中3では71.9%の高率に上る。低学年での単純な評価が、高学年になると自身の好みや、現実生活での関わりの深さも加えて評価に至っていると思われる。

#### 6. 町並みの好みからみた住宅と町並みの調和

子ども達に4枚の住宅の写真を示し、「住みたい家」と「住みたくない家」を聞き、それぞれ「内子の古い町並みに似合うか否か」を質問した。写真は近在の大きな農家、セは新築のRC住宅、ソは保存地区内の改修町家、タはピンク色のモダン住宅である。

住みたい家については、どの子どもも現代風の家に憧れており、モダン住宅69.7%、RC住宅13.5%と両者で大半を占める。農家は12.9%、町家はわずかに3.9%に過ぎない。同様に、住みたくない家は、町家44.4%、農家34.4%、RC住宅16.0%、モダン住宅5.2%であり、逆からみても町家の支持率は低い。もちろんこうした気持ちは、子どもの「夢」として語られたこともあり、当然と言えば当然である。グループ別に住みたい家を見てみると、農家と町家で愛着派の比率がやや高く、モダン住宅では比率がやや低くなる。逆に、モダン住宅やRC住宅の比率は非愛着派で高い。一方、住みたくない家については、町家は愛着派で低く、RC住宅、モダン住宅は非愛着派で低い。また、農家住宅は、この地域自体が農山村であるせいもあ

り、逆に子ども達からは嫌われたようだ(図10、図11)。

さて、子ども達にはさらに、住みたい家、住みたくない家に対して、それらが町並みに似合うかどうかを聞いたわけだが、それぞれ最も多く支持を集めたモダン住宅と町家について、グループ別の評価をみていこう。住みたい家の筆頭であるモダン住宅の町並みに対する調和は、愛着派の91.0%が似合わないとし、似合うとするのは1.6%に過ぎない。中間派は80.2%が似合わないとし、3.8%が似合うとしている。非愛着派は75.6%が似合わないとし、似合うとするものは4.9%に過ぎない。3つのグループの対比が顕著である。また、住みたくない家の筆頭である町家は、3グループとも同様な評価であり、ほんのわずかだが愛着派で高くなる(図12、図13)。

このように、夢に近い好きな住宅と現実の嫌いな住宅、そしてそれらが町並みに似合うかどうかは、ほぼ区別してみることができ、町家の存在は強く意識されているといえる。それでもこうした区別は愛着派で高く、非愛着派ではやや低くなり、町並みに対する思い入れの差が影響しているとみて良さそうだ。

#### 7. 町並み保存に対する子ども達の考え

##### (1) 保存地区の印象

子ども達が、保存地区からどのような印象を受けているかをみたのが表6である。町並みに対する肯定的要素では、愛着派は、中間派、非愛着派より多くの賛意を示し、否定的要素では、非愛着派、

中間派が多く賛意を唱えている。特に「町並みが美しい」ことについては比率で倍近い差があり際だつ。また、「静かでほっとする」「川や緑がきれい」「歴史がある」ことも愛着派で評価が高い。逆に、連続する町並みを「同じ家ばかりでつまらない」とするのは、非愛着派で24.3%、「人が少なく寂しい」「古くて気味が悪い」ことも各々20.6%、15.9%にのぼり、愛着派と非愛着派の対比が目立つ。しかし、他方で「土産物屋が楽しい」ことに対する印象は大きな差がなく、昨今の町の変化を読み取っているようだ。

(2) 町並み保存への賛否

子ども達による町並み保存への賛否として、「保存地区を残すこと」をどう判断しているかを聞いた。全体では、77.1%が「良い」、4.5%が「良くない」、17.9%が「わからない」としている。グループ別には、愛着派の90.4%が「良い」としているのに対し、中間派は71.2%、非愛着派は63.6%に止まり、「良くない」或は「わからない」が増える(表7)。愛着派の具体的かつ積極的な保存地区の評価は、子どもなりに町並み保存の大切さを認識していると言えそうだ。学年別には、残すことが「良い」とするのは小学生でやや高く、中学生で低い。また、「わからない」とするのは、小3、中2で高く、各々28.6%、25.2%という比率になった。

(3) 国や役場の関わりの認知

国や役場の町並み保存の努力については39.3%の子どもの認知しており、残りは知らない。この数字は小さな町にしては少ないのかも知れない。

グループ別には、愛着派の44.8%が認知しているのに対し、中間派は35.6%、非愛着派は38.3%が認知するに止まる(表8)。学年別では、小3で26.5%、小4で11.5%、以下順次増加し中3で60.2%に達する。やはり、学習や情報に接する機会の増える高学年ほど高い。

また、中学生のみに正式名称である「重要伝統的建造物群保存地区」を知っているかどうかを尋ねると、「内容を知っている」13.4%、「聞いたことがある」50.1%、「知らない」35.9%とまずまずの認知である。もちろん愛着派での認知が高く、前2者の合計比率は74.8%であり、対して中間派は58.8%、非愛着派は55.8%に止まり、ここでも違いは明確になる。

(4) 保存地区の改善案

保存地区で行われている事業も含めつつ、保存地区が良くなるための改善案を聞いた。「緑を増やすこと」48.4%、「保存のための改修・修復を行うこと」41.3%、「町並みに合う家を建てる」36.0%、など直接的な町並み改善に加え、「保存地区を広げる」ことにも39.6%の子ども達が賛意を示した。グループ別には、愛着派は上記の4点に加え、「昔風の店を作る」ことがやや多く取り上げられ、対照的に非愛着派では、「現代風の店を作る」ことが特徴的な提案である(表9)。学年別には、「保存のための改修・修復をする」ことについては中学生の比率が高く、その他は概ね小学生の比率が高い。特に「昔風の店を作る」「車を通行止めにする」「保存地区を広げる」「町並みに合う家を建てる」などの提案に対しては、小学生で

表7 町並み保存への賛否

	良い	良くない	わからない	不明	計
愛着派	254 90.4	4 1.4	23 8.2	-	281 100.0
中間派	272 71.2	22 57.5	85 22.2	3 0.8	382 100.0
非愛着派	68 63.6	9 8.4	30 28.0	-	107 100.0
計	594 77.1	35 4.5	138 17.9	3 0.4	770 100.0

表8 国や役場の関わりの認知

	知っている	知らない	不明	計
愛着派	126 44.8	147 52.3	8 2.8	281 100.0
中間派	136 35.6	238 62.3	8 2.1	382 100.0
非愛着派	41 38.3	66 61.7	-	107 100.0
計	303 39.3	451 58.6	16 2.1	770 100.0

表9 保存地区の改善案

	改修 修復	昔風の 店	現代風 の店	車の通 行止め	緑を増 やす	道路を 石畳に	地区を 広げる	町並に 合う家	実数
愛着派	136 48.4	90 32.0	16 5.7	40 14.2	152 54.1	62 22.1	127 45.2	118 42.0	281
中間派	145 38.0	104 27.2	50 13.1	90 23.6	168 44.0	91 23.8	150 39.2	133 34.8	382
非愛着派	37 34.6	26 24.3	24 22.4	19 17.8	53 49.5	28 26.2	28 26.2	26 24.3	107
計	318 41.3	220 28.6	90 11.7	149 19.4	373 48.4	181 23.5	305 39.6	277 36.0	770

賛意が多いことが特徴的である。

### 8. おわりに

子ども達にとって、住宅や建築物が町並みの景観にどう調和するか、また町並み保存をどう思うかについてみてきた。確かに子ども達の多くが町並みを愛し、保存を願っており、しかも中学生より小学生の方にそうした思いが少々強いわけだが、それにもまして大きな違いを生み出しているのは、実は町並みに対する好みの強さであり、それによって3つのグループに分けることができた。町並みが積極的に好きだとする愛着派は、町並みの景観における調和についてよく理解し、町並みとその保存を積極的に評価しており、文字通り町並みに愛着を抱いているといえよう。反対に町並みにあまり好意的でない非愛着派は、景観への調和について定かではなく、しかも町並みとその保存には消極的であった。このことは町づくりにおける「景観との調和」や「美しい景観」の類を子ども達に示す時、眼でみた景観のみではなく、町並みを作り出してきた歴史や人々の暮らしを丁寧に解きあかしつつ、町並みの大切さとその構成要素である景観の持つ意味を伝えていくことがあらためて肝心であることを示している。特に、子ども達のモダン住宅に寄せる思いと町家を見る眼の隔たりを考えた時、愛着派の町家への評価がわずかずつでも高いことを考慮すれば、やはり先に述べたような学習・教育が欠かせない。

すなわち、子どもに対する町づくりとその景観の学習・教育を考えると、町の歴史や人々の暮らしの有り様を踏まえつつ、自分達の町及び町並みに

対する関心や愛着心を掘り起こす作業が必要なこと、加えてそれらの上に乗っ取った景観や保存に関する教育が肝要と思われる。

最後に、調査に協力頂いた内子小学校と内子中学校の児童・生徒の皆さん、先生方、内子町役場の皆様へ感謝の意を表します。

### [注]

- 1) Geddes, Patrick 1854~1932 スコットランド生まれの植物学者、社会学者、都市計画家、教育家。都市を生物のように進化する有機体ととらえる彼は、その調査計画づくりを子どもから成人にいたる一般市民の事業と考え、そのための教育（自然学習、都市学習）と環境整備（公園などの文化施設づくり）を重視した。1899年、彼がエジンバラに開設したアウトロック・タワーは、環境教育の具体的学習手段として有名である。環境教育事典 p97 労働旬報社 1992、住環境教育研究会編：住教育—未来へのかけ橋— p86 ドメス出版 1982
- 2) 曲田清維：学校教育における都市教育の歴史的研究—小学校・中学校及び高等学校の社会科学教科書をもとにして— 日本都市計画学会都市計画論文集24号 pp517~522 1989
- 3) 景観の定義については様々であり、例えば「自然と人間界のことが入りまじっている現実のさま（広辞苑）」のように、人々の生活空間としての自然や歴史、生活の総体とすることもあるが、ここでは自然景観や都市景観、或いは町並みの景観のように、自然や建造物が作り出している、見える景色や眺めとする。

- 4) 環境認識に関する子どもの位置付けについては、ケヴィン・リンチが「彼らの生活環境に対する主観的認知は、いっそう広い見地にたつ都市の全住民のそれと同様に、万人のためによりよい生活の質を実現しようとする企てのなかで、重要な因子として評価されなければならない。」とその重要性を述べている。また、最近のわが国の景観研究については、町づくりを目的にした景観整備や教育学習の研究が目立つ。その中で、景観認識の研究は、意識や評価・イメージをアンケートや写真、地図、スケッチマップ等で問う方法が試みられている。ケヴィン・リンチ著 北原理雄訳：『青少年のための都市環境』鹿島出版会 1980、倉原宗孝 延藤安弘：『計画行為における価値づくりに向けての町づくりコンクールの有効性に関する考察』日本建築学会計画系論文報告集 No. 433 95～104 1992
- 5) 鳴海邦規編：『景観からのまちづくり』学芸出版社 pp 147～161 1988
- 6) 池田孝之：『子どもが見つけた身近なまち景観—新しい都市・住環境教育の試み—』琉球大学教養部都市計画研究室 1987
- 7) 内子町は愛媛県の中西部に位置した人口12,800人の農林業の町。「歴史と文化の創造」の下に、町並み保存、村並み保存を掲げ、環境整備や景観行政に力を入れている。町並み保存地区である八日市・護国地区は、中心商店街に隣接した旧街道沿いに位置し、連続する平入りの町家とそのナマコ壁やうだつが美しい。現在、重要文化財の民家3軒に加え、約半数の町家の改修・修復が行われ、地区外の大正期の劇場である内子座等とともに、保存と周辺の住環境整備が進行しつつある。内子町役場：『UTIKO 町勢要覧 1990』宮澤智士編：『内子の民家と町並み 内子町 1991』
- 8) 松山市三津浜地区で行った「子どもの住環境認識に関する調査(1989年10月 曲田清維)」では、小学1年生から中学3年生までの子どもに対して、三津浜の古い倉庫群に子ども達自身の住宅がどう調和するかを質問紙法で尋ねたが、小学1年生及び2年生では判断が難しく、その結果をもって、本調査では最初から対象を小学3年生以上に限定した。
- 9) 保存地区に近接した子ども向けのファンシーショップをイメージして、よく似た感じの他地区の店舗を提示した。

〔文献紹介〕

◆「週刊教育資料」日本教育新聞社 (Educational Brain) に連載された「私たちの環境教育」より

平成4年6月8日 (No.302) から月曜日ごとに上記テーマの記事が2ページにわたって同誌に連載されている。小学校、中学校、高等学校、さらには環境行政などで環境教育にたずさわっている人びとによって実践をふまえた環境教育論が展開されている。以下にそのいくつかのテーマを紹介しておこう。

自然観察による環境教育 (山田博一)、体験活動を通して地域の環境を考える (佐藤英充)、鳥からの出発—愛鳥活動を通して (桐生幸子)、身近な素材を生かした環境教育 (寺田政則)、都

会のオアシス稚子川での野生生物保護活動 (松下希一)、博物館のある高校 (倉成英昭)、全校あげて「水」に取り組む (中野正堂)、アルミ缶回収による福祉援助活動 (小林晃)、みぞっこ探検 (山下史雄)、全校作業学習で環境教育を (黒島直人)、総合学習としての「環境学」 (中道貞子)、ホテルの飼育・保護活動を通して (西尾伍三男)、環境教育の位置づけと展開 (小野芳幸)、体験を通して地域の環境を考える (安田まさ子)、一人一鉢栽培活動を通して (青木勉)、科学部の自然研究活動 (大内規行)、自然を大きくとらえ、自然を豊かに (松田史文)、公園の主人公に (大野嘉章)、ビオトープ・福祉教育への道 (赤尾盛志)

それぞれに参考になる内容である。(Z.S.)